

August
02,
2002



対談 インターネットの彼方に 第3回

【Guest】

都築響一

T s u z u k i K y o i c h i

×

小崎哲哉

O z a k i T e t s u y a

構成：長野弘子 photo：Kaizuka Jun-ichi

ウェブ上の展覧会には 始めはあるけど終わりはない

TSUZUKI KYOICHI × OZAKI TETSUYA

「ウェブの中の美術館」という試みは、日本だけに限っても、ICCのプレオープニングイベント「電話網の中の見えないミュージアム」(1991年)「on the web ネットワークの中のミュージアム」(1995年)など、すでに何度が行われている。都築響一の「IMA」が新しいのは(そして苦戦しているのは)、入館料を取ろうとしている点だ。ウェブコンテンツ=無料という悪しきイデオロギーはいつの日にか消え去るのだろうか？

小崎哲哉

美術館の改革に挑戦するIMA

小崎：都築さんは大学在学中から「ポパイ」の編集、そのあとは「ブルーラス」の創刊に携わるなど編集者として活動する一方で、写真家としても活躍しています。東京の居住空間を撮影した「TOKYO STYLE」のほか、日本各地の奇妙なスポットを取材した「ROADSIDE JAPAN 珍日本紀行」は1998年度の木村伊兵衛賞を受賞されました。現在は、インターネット上の美術館「インターネット・ミュージアム・オブ・アート」(以下、IMA)の館長とキュレーターを務めていますが、まずIMAを始めたきっかけを教えてください。

都築：ほかのプロジェクトと同じく、「義憤」ですね。たとえば「TOKYO STYLE」は、狭くて汚いけど居心地のいい部屋を撮ったわけだけど、これは、建築雑誌が広くてカッコいい部屋しか載せないからなんです。ミース(ミース・ファン・デル・ローエ、ドイツの建築家)が設計したような家に自分が住んでいるならわかるけど、そんな編集者はいないでしょ。だから、べつに建築の専門家でもない僕がしかたなくやったんだよね。「珍日本紀行」にしても、旅行雑誌は田舎の日本とくれば、春には桜の見える露天風呂、秋には紅葉の見える露天風呂ばかり載せる。テレビの旅行番組だって、あぜ道の土手におじさんがしゃがんでいて、声をかけると「いま山菜を取っていて、これから山菜ご飯作るから食べにくるか」みたいな嘘ばかり。だから、風呂とご飯だけじゃない田舎の日本の楽しみかたを、やむをえず僕が取材したわけですよ。

IMAの場合もまったく同じで、僕はずっと現代美術が好きだったけど、ここ数年は作品を見る側にまわったのね。そうすると、美術界は、ギャラというものが存在しないという異常な世界だと気付いたので。展覧会で入場料取っているにもかかわらずギャラがもらえないわけよ。

小崎：出版界も、原稿料を前もって言わないという悪しき慣習が残っていますね。

都築：でも原稿料はまだあるでしょう。いくなれば、美術界はインク代とA4の紙代は出すけど原稿料はゼロなんだよね。音楽業界でも、100人規模のライブと1万人の武道館ではギャラが違う。だからがんばって大きなライブをして、そのお金を次の作品の制作にまわす。漁師もいい魚を獲ってお金をもらい、新しい漁船を買いますよね。すべてはそうだけど、世の中に1

つだけ例外がある。それが美術界なんです。入場料がどこに消えるか非常に不透明なシステムで、バンドは客が入らなかつたら道ばたでフライヤー配って必死で人を集めるけど、キュレーターは人が入らなくても給料は一緒。逆に人のいない展覧会のほうが知的でオシャレという感覚もある。それを変えるには、美術館の学芸員は絶対に出来高制にすべき。入場料がアーティストに還元される仕組みをどうしても作りたくてIMAを始めたのです。よく「インターネット上でないと表現できないアートの可能性」と対外的に言いますが、そんなことはどうでもいいんですよ。もし地面を買えたら、それを買って美術館を開いています。

小崎：僕のやっている「REALTOKYO」もまったく一緒ですよ。カルチャー重視の新聞は、ニューヨークでは「ビレッジボイス」



パリでは「リベラシオン」、ロンドンでは「タイムアウト」がありますが、日本にそれがないのは、どう考えてもおかしいという所から始まっています。

都築:日本の現代美術アーティストは、作品を売って生活することができないからバイトしたり先生をやっていたりするんですね。教師とアーティストの両立なんて、できっこないし嘘だと思っただけで、そうせざるをえない状況に日本のアーティストは置かれている。だから、IMAは現代美術の分野では世界で初めての有料サイトとして、売り上げはサイトを制作したプロバイダーとアーティストで折半しています。

始めてから発見したウェブの特性

小崎:IMAが可能になったのは、少額決済など技術的な面も大きいですね。

都築:そう、本当は2~3年前からやりたかったけど、常時接続、決済面のセキュリティー、コピーライトの問題などの技術がまだ整っていなかった。ようやくここ1年くらいで整ってきて、実際にやってみてわかったことも多かったです。たとえば、映像作品などは椅子のない美術館で立ち見るより自分の部屋でゆっくり見られるので便利。それに、ウェブ上の展覧会には始めはあるけど終わりはないという点が大きな違いだと思う。IMAは新しい展覧会が始まっても前の作品が残り、1回ずつ部屋が増殖していく美術館なんだよね。さらに、本や美術館は1回作ったらおしまいなんだけど、ウェブの場合は新しい作品が入ったらどんどん更新していけることも大きいです。たとえば第1回の展覧会は、東京の100部屋を360度回転させて見せる僕の作品「賃貸宇宙」だけど、この中身も入れ替えていこうと思っているんですよ。これもウェブのすごい特性だと思いますね。

小崎:ほかに、大竹伸朗、キュビキュビ、ビデオアーティストの宇川直宏が参加していますね。宇川くんの場合、彼の作品のほとんどがここに掲載されています。まだ未完成で、やりたいことが多すぎて見切り発車した感じが、普通的美術館ではありえなくておもしろいですね。

都築:IMAではあと2年くらいは、日本の

アーティストのみに出展してもらう予定です。その理由は、めちゃくちゃおもしろい日本人作家は多いけど、美術館やコレクターが買わないし、展覧会をやらないので、海外に流出しているからです。だから、日本人作家のいい展覧会や作品が外国でないと見ることができないという不思議な現象が起きている。竹橋の国立近代美術館が改装されて、取り上げるアーティストがカンディンスキー(ワシリー・カンディンスキー、旧ソ連の抽象画家)ですから。だから、IMAが日本人の現代美術のレファレンスになればと思うんだよね。

小崎:例外的に村上隆さんのフィギュアが5,000万円で落札されていたけど、あれはあれで「ステレオタイプの日本」という戦略が見え透いていて、僕は好きになれないな。米国やフランスで評価されていますが

それとは違う形でリアルな日本のアートが国内外で紹介されることは必要ですね。

都築:IMAでアーティストを選ぶとき考えるもう1つの基準は、「デジタル技術に詳しくない人」ですね。詳しい人は自分で限界を作ってしまうのでおもしろくない。知らない人は、VHSテープ5本渡して「これではよろしく」とか、「これ後ろから見られないの」みたいな意見を出してくるので、アーティストとウェブデザイナーのコラボレーションが生まれる。そういう作業を僕はすごく大事にしたいなと思っているんです。

アートを語るんだつたらまず自腹を切れ

小崎:その一方で、ICCで7~8月に開催された「アート・ビット コレクション」のように、ウェブの技術をアート作品としてとらえた展覧会もありますね。点と線で生き物



やりたいことが多くて見切り発車した感じは 普通的美術館ではありえない



TSUZUKI KYOICHI x OZAKI TETSUYA



を作り重力や速度などのパラメーターを選
ぶと、その生き物が伸びたり走ったりする
プログラム「ソーダプレイ」^{KJump}は、方向
性は異なるけどおもしろい可能性があります。
また、IMAを見て思ったのは、都築く
んはコレクターですよね。大竹伸朗の作品
も初期の頃から集めているし、「鳥羽国際
秘宝館・SF未来館」もまるごと買ったし。

都築：すべては本の素材ですよ。本を作り
たいかどうかの基準は、自腹で買ってもし
いかどうか。僕がキュレーターや評論家を
信じないのは、彼らは自分で買わないか
ら。アートを語るんだったらまず自分のボ
ーナス全部出して買うくらいはしてほしい。

小崎：ヘミングウェイがパリに行ったとき、
ガートルード・スタインという女流作家に
「パリは芸術の都で画家がいっぱいいるん
だから、まず絵を買いなさい。お金がない
んなら、自分の買える額のものを買ってち
ょうどそれが同世代の作品になるわよ」と
言われたんだよね。

都築：そうそう、どんなに偉そうなこと言
っても自分のお金を10万円出せるかどう
かは、すごい決断なわけ。以前、僕と大竹
伸朗で完全手作りの100部限定本を55万
円で販売したんだよね。そのとき、東北地
方から展覧会の初日にいつも来てくれるフ
ァンの人がやってきて、全部しわくちャの
1,000円札で買ってくれたんだよ。どんな評
論家にほめられるよりも、こうしたファン
が1人いることが、作家にとっていちばん大
事だよ。それと、集めることによる量の
パワーも重視しています。東京の狭い部屋
を5件撮るという企画はいくらでもあるけ
ど、100件集めると違うメッセージが生ま
れてくるんだよね。

小崎：IMAでぜひアーティストを増やして
いってほしいですね。また、オフラインの
イベントや他メディアとの連動は意識して
いますか。

都築：今後は東芋、木村友紀などを予定し
ています。また、ワークショップという形で、
自分の住む部屋の写真を送ってもらって、
おもしろそうな部屋は僕が撮影しに行きま
す。また、木村友紀は、自分が死ぬ前に走
馬灯のように思い浮かぶイメージを送っ
てもらい、それをもとに作品を作っています。



どのメディアでも基本は同じで、まず物凄
くやりたいことがあるかどうかですね。僕
の「賃貸宇宙」もそうですが、狭い部屋を
写真で撮っているとどうしても反対側も見
なくなる。友人の家に遊びに行ったとき、
相手がお茶を入れに行ったときに本棚や
CDをチラッと盗み見するじゃない。そう
いうふうには部屋を見るのがいちばんおもしろ
いんだけど、ビデオで撮影しても撮る人
の視線と時間軸でしか見ることができな
い。何か方法を探していたとき、360度の
バーチャル空間を作り出す技術「iPix」に
出会った。これで、人の家にずかずか踏
み込む感じで部屋のなかを動いて見るこ
とができるようになったわけ。だけど、メ
ディアの特性を考えるより、どうしても見せ
たい何かがあるというのが最初。

小崎：まず欲望が先だよな。

都築：そう、学校でフラッシュ習ったから
何か作ろうじゃ駄目。僕も写真のレクチャー
で「何撮っていいかわからないんです」
とよく言われるけど、そういう人は撮る必
要はない。アートは、写真撮らないと気が
狂うとか、日記を書くとかやっとな学校に行け
る人たちのものであって、人あたりがよく
て仕事も金もある奴は、もっといい人生が
ある。作家がアウトサイダーである必要は
ないけど、時給に換算してみればこんなに
悲しい商売はないよね。やらなきゃ死ぬ
という時期が誰にでもあると思うから、そ
れを大事にすべきです。

小崎：みなさん、どちらの人生を選ぶかを
よく考えるべきですね(笑)。

^{KJump} www.sodaplay.com

イベントを開催します。

『インターネットマガジン』では、本対談記事と連動したト
ークショー形式のイベントを開催しています。次回は9月
5日(木曜日)@六本木THINK ZONE。ゲストはエディ
トリアルデザイナーの宮崎光弘さんです。詳しくは本誌
ウェブサイトをご覧ください。なお、座席数に限りがありま
すので受付終了となった際はご了承ください。

^{KJump} internet.impress.co.jp/realtokyo/

Special Thanks to:

森ビル株式会社 Roppongi Hills Information Center / THINK ZONE
株式会社イデー Library Cafe te





[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp